顔面神経麻痺をきたした悪性外耳道炎症例

笠井美里　峯川　明　飯塚　崇
古川正幸　岡田弘子　池田勝久
順天堂医院

72歳男性．右外耳道炎の診断にて近医通院していたが，右顔面神経麻痺出現し紹介受診．麻痺スコアは22/40，外耳道下壁に隆起性肉芽性病変を認めた．右鼓膜は膨隆し鼓室内に膿汁のたまりを認めたため鼓膜切開し排膿を行い，チューブ留置した．前医の検査にてコントロール不良の糖尿病を合併しており，即日入院しインスリン導入後，プレドニゾロン60mgからの漸減療法と抗生剤投与，連日耳洗浄を行った．耳漏の細菌学的検査で緑膿菌を検出した．また，外耳道下壁の肉芽病変から生検施行したが，granulation tissueであった．CT上膿瘍形成なく，腫脹は徐々に軽快し退院となった．排膿は継続したため，近医にて耳洗浄連日施行し耳漏は消失，顔面神経麻痺も徐々に軽快した．発症から5か月経った現在36/40となり再発は認めず，引き続き外来経過観察中である．